

Title	ゼーリング教授の農業恐慌論
Author(s)	静田, 均
Citation	経済論叢 (1931), 33(4): 570-587
Issue Date	1931-10-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/130089
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第

卷三十三第

行發日一月十年六和昭

論叢

公私混合營業……………法學博士 神戸正雄
英國の重農主義者……………經濟學博士 堀經夫
マルクス地代論の解釋……………文學博士 高田保馬

時論

滿蒙爭議の實相……………經濟學博士 作田莊一

研究

金數量説に就いて……………經濟學士 松岡孝兒
ゼーリング教授の農業恐慌論……………經濟學士 靜田均
住居統計に就いて……………經濟學士 岡崎文規

說苑

育子教諭書について……………經濟學博士 本庄榮治郎
商品勘定の損益分記法……………經濟學士 小菅敏郎
助郷不勤滞金の處分……………經濟學士 黒羽兵治郎
デニールの「漁業經濟論」に就いて……………經濟學士 岡本清造
纖維工業と勞働……………經濟學士 菊田太郎

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

ゼーリング教授の農業恐慌論

靜 田 均

は し が き

十九世紀末の國際農業恐慌は、最初の資本主義的農業恐慌として、極めて重要な研究題目を形づくつてゐる。この稿はそれに関する好文献の比較的乏しい中にあつて、この方面の權威と認められるゼーリングを經とし、スツデンスキイを緯として、一應の概觀を與へ、最後に若干の吟味と補遺とを加へようとするものにすぎない。

一、ゼーリングの説（その一）

ゼーリングは農業恐慌を定義していふ、『多數の農民を家財の喪失をもつて脅し、さらには廣大な領域を荒廢をもつて脅すが如き價格形成、およびそれより生ずる費用と負擔との收入に對する關係である』¹⁾と。従つてゼーリングにあつては、農業恐慌の問題は價格問題に解消する。あるひは、農業恐慌の理論はまづ價格の理論でなければならぬ。

農業恐慌の概念規定より出發して、最初にゼーリングの指摘するところは、工業恐慌と農業恐慌との相違點である。彼によると、農業は、高度資本主義時代に於ける工業的發展を特徴づける上昇と下降との短期の交替、すなはち過剰生産と生産の停頓との規則的循環を示さない。何とな

1) M. Sering; Agrarkrisen und Agrarzölle. 1925, S. 7.

れば、農業においては、工業や交通業が企業者の意志に與へるが如き、自由な活動の餘地が缺けてゐるから。工業においては、強力な生産力がある一點に集積する可能性が、繰り返しく生産財の生産部門における資本の過剰投下に導き、かくして過剰生産すなはち財の生産の内部における不均衡を生ぜしめ、それに先立つて暴騰した價格を瓦解せしめる。ところが農業にあつてはさうした経過を辿らない。けれど、農業は分散した土地における緩慢な有機的成長現象と結びついてをり、かつ生活必需品である農産物の需要はすこぶる弾力性に乏しいから。

ゼーリングの農業恐慌論の出發點は、農産物の價格は原則として『規則正しい上昇傾向』を有し、これが『ノルマルな價格運動』だ、といふ考へである。『天候の影響をしばらく度外し、發展の大綱を眼中におけば、植物性および動物性生産物の價格は、規則正しい上昇傾向を有し、つねに異常なる歴史的事件のみが價格發展のノルマルな行程を破つたことが看取される²⁾』。つまり農業恐慌は、彼によると、この『ノルマルな價格運動』が何らかの事情によつて破られたときに生ずるアブノルマルな價格形成の直接の結果にはかならぬのである。従つてゼーリングの農業恐慌論を理解するためには、その根底に横たはるところの農産物のノルマルな價格運動に關する彼れの見解に、一瞥を投ぜねばならぬ。ただし、實をいふと、それはここに紹介すべくあまりに周知の理論であつて、彼自身も斷つてゐる如く、リカアドウおよびチュウネン流の價格法則を骨子とするものにすぎないのだが。

即ち『都市の人口が増加すると、食料品および有機的原料に對する需要は、他の事情にして變化なければ、勞働と生産手段

とのより多くの充用によつてのみ満足されうる。農産物の價格は、より悪しき又はより遠き土地を耕作に付し、もしくはより集約的に——すなはち絶對的にはもちろん、たいていは相對的にもより高き費用をもつて——經營することを許すほどの額に騰貴せねばならぬ。それゆゑ人口増加の結果は、大量的土地生産物の價格を昂騰せしめ、かくして都市は等量の土地生産物に對して從來より多くの工業品を提供せねばならぬといふことになる。³⁾

ゼーリングはこれを『農産物の交換價值騰貴の法則』または『農産物の購買力増進の法則』とよんでゐる。ここに注意を要するのは、右の法則は農業上および工業上の技術の不變を前提とするものであつて、技術の進歩の如何によつては、費用を増すことなしに耕作を擴張し、または集約化することができる、といふことだ。ゼーリングもこの事實を否定するものではない。明かに肯定を與へてゐる。が『しかし』と彼は強調する。

『あらゆる一つ一つの時點においては、與へられた技術をもつて計算すべきである。それゆゑ農産物の需要は供給を凌駕し、農産物の價格は工産物の價格を凌駕するといふことは、つねに根本的な傾向である。⁴⁾』

要するにゼーリングによれば、農産物の價格はそれ自體たえず騰貴するばかりでなく、工産物に對しても、相對的に騰貴することをもつて原則とする。さうして彼はこの傾向の中斷または逆轉に農業恐慌を見るのである。

二、ゼーリングの説(その二)

我々は前節において、ゼーリングの農業恐慌に關する抽象的・一般的規定を明かにした。この抽象的・一般的規定より出發して、彼は十九世紀末の國際農業恐慌をいかに説明するか？ しば

3) a. a. O., S. 8.
4) a. a. O., S. 9.

らく彼れの語るところを聴かう。

一 ナポレオン戦争後すなはち前世紀の二〇年代において、ヨーロッパ諸國は激烈な農業恐慌に襲はれたが、三〇年代のはじめとともに低價格は克服され、『農産物の購買力増進の法則』は、再びその效力を發揮した。ドイツでは四十五年間を通じて穀物價格はだいたいにおいてつねに騰貴の趨勢をたどつた。イギリスでは、自由貿易の採用にも拘らず、ほぼ同じ高さを保つた。ここでも工産物に對する農産物の交換價值は騰貴した。かくして中歐および西歐の農業は輝しい開花期を迎へた。ところが七〇年代の後半になると事情はまるで一變し、再度の危機が當來した。何故その原因であるか？

第一に交通機關の發達は新大陸とヨーロッパ大陸との距離を著しく短縮した。『大量輸送の技術の大規模の發展は、北アメリカ内部の牧場地帯および狩獵地帯をヨーロッパの穀物市場および肉市場の領内に押し進めた。』¹⁾だがゼーリングによれば、それだけでは必ずしも決定的な影響をもたらない。彼は強調する、

『しかし、單なる技術のみをもつては、何事をもなすことはできぬ。廣大な原野を穀物畑に變じ、土地の低廉な大量生産物によつて近代的世界經濟を招來し、地上の最も強大な國土を建設した力は、際涯なき自由地に對する人類のファウスト的渴望であつた。』²⁾

すなはちゼーリングは、十九世紀末における農業恐慌の決定的原因を合衆國西部地方における移住者たちの大規模な未墾地の開拓に求めるのであり、しかもこの運動の背後に作用する精神的要素を特に重要視するのである。のみならず彼は、この開拓が驚くべき急速なテンポをもつて進

1) a. a. O., S. 13.
2) a. a. O., S. 13.

行したについては樹木と石塊の乏しい大平原の存在に負ふことを指摘することを忘れない。

『五〇年代よりこのかた、北アメリカの西漸運動者たちは、森林地帯から殆んど樹木といふもののない大平原^{プレーリー}に出かけて行った。こゝは平坦な石ころのない野原で極めて急速な開墾を許し、かつ鐵道の敷設に何らの障礙をも伴はぬところだ。北部地方の自由農民が南北戦争によつてかちえた一八六二年の家産法は、無償の土地から儲のあがる農地がえられるといふ福音によつて、東部諸州およびゲルマン諸國出の何十萬何百萬といふ移住者たちをひきつけた。』

農場の数は、一八六〇年の二〇〇萬から、一八八〇年の四〇〇萬へ、さらに一九〇〇年には五七〇萬へ増加すると同時に、農地面積は、一八六〇年の六六〇〇萬ヘクタールから、一八八〇年には一億一五〇〇萬ヘクタール、一八九〇年には一億六八〇〇萬ヘクタールへと飛躍をつづけ、従つて穀物および肉の生産もまたその間に著しく増加した。かくて七〇年代には、北アメリカ西部地方の農業の競争が妖怪の如くだしぬけに現はれた。これまでは露獨を先頭として、ヨーロッパ大陸がイギリスの工業地方に食糧を供給してゐたのに、八〇年代のはじめには、北アメリカは小麥および小麥粉の供給高の七割をしめ、輸入肉類の大部分を供給するにいたつた。

合衆國における植民は八〇年代の終ごろにはほぼその頂點に達し、爾後、降雨量の充分な國有地はやうやく缺乏をつげた。が、それと前後して、新たに他の國々が競争の舞臺に登場した。すなはち八〇年代にはセント・ローレンスの農民の子弟や合衆國の農民や投機取引業者たちによる北カナダの植民が、九〇年代にはイタリアの借地農によるラ・プラタ地方の植民が抬頭した。これらに比べると遙かに小規模ではあるが、オウストラリアや南アフリカにも植民が行はれ、大草原の開拓が試みられた。同じことは、シベリア鐵道の開通と同時に發展したロシアの植民につい

3) Sering; Internatioale Preisbewegung und Lage der Landwirtschaft in den aussertropischen Ländern. 1929. S. 3.

でも見られた。いまや穀物の過剰は不可避免的となつた。ゼーリングはいふ。

『農業生産は人口の増加を凌駕し、供給は需要を凌駕した。ヨウロッパ市場の充溢が現はれた。価格は往々北アメリカ合衆國およびカナダ西部地方の自己費用の高さをずつと下まわつた。そしてそれは北アメリカ合衆國やカナダの擴張運動を喰ひとめる如き結果をもたらした。最も危険な競争者として現はれたのは、アルゼンチンの海岸に近き耕地における寡欲なイタリアの移民とロシアの農民とであつた。なぜなら、双方とも高額の小作料や高利貸や租税の重壓のもとにたち、そこでもこでも紙幣制度が土地の耕作者の搾取を極度に高めたからである。』⁴⁾

二 十九世紀末の農業恐慌の特質の一つは、價格下落の重心が穀物にあつて、肉類は割に輕微であつたといふことである。それについてゼーリングは語る、

『大平原の移住民たちはいたるところまづ小麥の耕作を選んだ。といふのは、これぐらゐの經營資本しかいらぬものはほかにないし、またこれぐらゐはやく農民に資本を回收させるものはないからである。それゆゑ八〇年代および九〇年代の農業恐慌は、本質的には穀作のみを襲つたのである。』⁵⁾

もちろん多量の家畜や肉類——特に豚肉——が合衆國から西ヨウロッパにはいつてきたことは事實だ。けれども損じやすい品物を遠方から新鮮な状態のままで輸送することは、まだ満足な成績をあげえなかつた。だから、ヨウロッパの工業地帯の周圍の農民にとつては、精良な肉と酪農品との生産が相變らず留保されたのである。

最良の牛肉の價格は一八八六年來はじめて下落を示したが、舊平均水準(自一八五一年至一八七五年)を一〇%と下らなかつた。豚肉の價格の年平均はより強く下落し、一〇—二〇%におよんだ。これに反して、小麥の價格は八五年において舊水準の六〇%に、九〇年代の中ごろには四三—四九

4) Agrarkrisen und Agrarzölle. S. 14.
5) Internationale Preisbewegung. S. 3.

小麥一噸(千斤)當リ價格の變動

年 次	イギリス	舊プロシヤ
1831--1840	254.0 ^{マルク}	138.4 ^{マルク}
1841--1850	240.0	167.8
1851--1860	250.0	211.4
1861--1870	248.0	204.6
1871--1875	246.4	235.2
1876--1880	206.8	211.2
1881--1885	180.4	189.0
1886--1890	142.8	173.9
1891--1895	128.2	165.5
1896--1900	137.1	160.9
1901--1905	142.2	163.8
1906--1910	160.0	201.8
1911--1913	161.7	202.0

Sering; Agrarkrisen und Agrarzölle. S. 97.

はなくなつて、パン用穀物の耕作は半分以下に萎縮してしまつた。小麥の作付面積一八七〇年三七〇萬エーカー、一九〇〇年一七〇萬エーカー。廣大な耕地が牧場と化し、雜草の生ひ茂るにまかされた。大陸諸國の多くでは、穀價の崩落によつて全農村が荒廢に歸した。これに反して、大陸のすべての輸入國は穀物關稅によつて自國の農業の保護に専念した。例へばドイツでは、農産物の購買力を工産物に比して先行二五年間平均より高からしめることに成功した。穀物價格は保護關稅の設定にも拘らず下落したが、工産物すなはち肥料、機械、動力素等の價格は法外な生産技術の發達と原料の低落のため、もつと下に落ち込んだ。かやうな農産物の工産物に對する交換價值の騰貴は、恐慌期間を通じて、ドイツの農業の集約度を維持したのみならず、かへつてそれ

%に下落した。國內飼料穀物の價格は緩漫に、玉黍蜀の價格は急速に小麥價格の跡を追つた。

三 こうした價格下落を指標とする恐慌は各國の農業にどんな影響を與へたか？ まづ自由貿易を奉ずるイギリスを見よう。ここでは恐慌がなканづく深刻を極めた。穀物耕作は引合

を高めることをさへも許した。要するに當時のドイツその他の大陸諸國の商業政策の重點は、——オランダ、ベルギー、デンマーク等の如き集約的な牧畜を營んだ國々を除けば、——農業關稅にあつた。それは農業の維持のために都市および工業地帯に課稅し、工業化と都會化の嵐の如き過程を緩漫化した。都市への夥しい流出に拘らず、ドイツの農村人口はだいたい同じ狀況を保つことができた。最後に注意を要するのは、ただにヨーロッパのみならず、合衆國自體の内部においても、價格崩落は恐慌に導いたといふことである。ゼーリングをして語らしめよう。

「十九世紀の最後の六分の一に世界市場價格がその低位に達したとき、それは合衆國やカナダの如き主要供給國における穀作の生産費の狀態をあらはすものではなかつた。八〇年代の前半におけるアメリカ小麥の市場充満は、北アメリカそのものに極めて激烈な農業恐慌を喚び起した。それは緊急信用による負債の増加、土地・馬車・器具・家畜・穀物等の大量的抵當入れ、公賣處分件數の増大のうちに明瞭に看取される。穀物價格は耕作の外圍においては西ヨーロッパより甚だしく低かつた。さうして當時、西部地方のはづれでもはや小麥一ドツペル・ツェントナーに六マルク以上支拂はれず、價格が往々三マルクに下落したことは、幾千人もの農民の破滅を意味した。その結果は西部植民地における穀物面積の擴張運動の中止であつた。」⁶⁾

四 穀價は一八九六年以來たどたどしい步調で恢復しだし、ついで一九〇四年には力強くかつ規則的に騰貴しはじめた。

イギリスの小麥は一九〇六—一九一三年には噸平均一六〇—一六二マルクで、不況の初期である一八八一—八五年の一八〇マルクに比してより低いが、それでもより以上の價格騰貴を期待することができた。大麥・燕麥および稈麥の世界市場價格は、だいたいにおいて小麥よりも有利な價格運動を示した。動物性生産物（肉・乳製品）は總じて穀物ほどの低落を示さず、優良品はつね

6) a. a. O., S. 5.

に若干の利得をもたらした。これを要するに、戦前十年間におけるイギリスの農業は、不利でなかつた、といつてよい。オランダ、デンマルク、ベルギー等では、二〇世紀の初頭以來、穀物關稅をかいでゐるたにも拘らず——オランダ、デンマルクは肉關稅もなし——農民は世界市場の情勢に完全に順應したため、恐慌より超越することができた。ドイツでは、一八七九年に創設され爾後漸次引き上げられた關稅は、農業を激烈な恐慌から庇護した。

一方、供給の壓迫は十九世紀末以來ますます衰へた。けだし植民地の移住の條件は、いたるところ急速に惡化しはじめたからである。アメリカは一八九〇年よりこのかたもはや植民地ではなくなつた。一九〇〇年以後は、土地の缺乏が感じられ、地價は法外に高くなつた。いまや農産物を増加する主要手段は、新しい土地の開拓ではなくて、生産の集約化であつた。西端地方にいたるまで耕作と牧畜との混合經營に移つた。玉黍蜀の主産地では資本集約的な牧畜業が、北西の草原地方では搾乳が、人口の稠密な東部では商業作物および果樹の栽培が行はれるやうになつた。合衆國は急に一流の工業國となつた。農業に従事する人口の比率は一八四〇年七七・五%、一八七〇年四七・五%、一八九〇年三九・二%、一九〇〇年三五・七%、一九一〇年三二・九%。もはや移民の多くは土地を求めないで、都市の勞働者となつた。一八九〇年以來、人口は農地の擴張よりも速かに増加した。穀物および肉の輸出は、戦前の十五年間において急速に減退し、牛肉の如き殆んど輸出を停止した。

九〇年代にはカナダ、アルゼンチン、オウストラリア、およびロシア等の植民が行はれたが、

合衆國の穀物地帯の如き恵まれた自然的生産條件および生活條件とは匹敵すべくもなかつた。従つて、海外諸國における耕作の擴張のテンポは、合衆國のそれに比して遙かに劣るものがあつた。ゼーリングはいふ、

『カナダ、アルゼンチンおよびロシアにおいて當時なほ有力に進展しつゝあつた植民は、急速に増殖しつゝある人口の食糧需要を、すでに戦前において、もはや粗放的方法だけで充すことはできなかつた。單位面積當り收穫の遞増が再び必要となつた。アブノルマルな價格形成のときがすぎ去つた。集約的經營は再び有利となつた。なぜなら、大平原地方の生産が需要の増大におくれたから。』

三、スツデンスキイの批判と彼れの積極説

以上に紹介した十九世紀末の農業恐慌に關するゼーリングの説については、周知の如く、彼とスツデンスキイとの間に論争のあつたところである。我々は次に、スツデンスキイのゼーリング批評とさらにそれを通してスツデンスキイ自身の積極説とを見なければならぬ。

一 スツデンスキイによれば、ゼーリングの説のうち第一に問題となるのは、彼れのいはゆる『アブノルマルな價格形成』を誘發せる新しい土地の開拓の速度を決定する原因は何か、といふことである。スツデンスキイによると、『ゼーリングはこの核心的問題に直接答へてゐない』（四七四頁）。あるひは、開拓の速度は未墾地の豊富さに依存するといふのかもしれないが、しかしかやうな答から世界市場價格の運動を説明することは不可能だ。一八七五—一九〇〇年の農業恐慌の發生も終結も、未墾地の豊富によつて與へられはしない。なぜなれば、今日といへどもなほ廣大

7) Agrarkrisen und Agrarzölle. S. 23.

1) G. A. Studensky; Entwicklungslinien der landwirtschaftlichen Weltproduktion. Weltwirtschaftliches Archiv 31. Band (1930 I). S. 471 ff.

な未墾地が存在するから。さうしてスツデンスキイ自身は、西部地方の急速な開拓を交通の發展と農業における機械の使用とに歸せしめんとするものの如くである。

二 ゼーリングは十九世紀の農業恐慌において、穀作がもつぱら集約性の増進を犠牲として擴張をとげた、といふ命題をたててゐる。つまり、これがため收穫遞減の法則が一時無効に歸した結果、穀物價格が一般的價格水準以下に落ちたといふのであるが、これは事實に符合しない、とスツデンスキイはいふ。それについてスツデンスキイは、まづ合衆國の農業に關する次の如き統計を掲げ、問題の解決を數字的に實證しようとする（四七五頁）。

年 平 均	農業總生産指數*	年 次	耕作面積指數
一八六六——一八七五	一〇〇	一八七〇	一〇〇
一八七六——一八八五	一五九	一八八〇	一三一
一八八六——一八九五	二〇四	一八九〇	一五三
一八九六——一九〇五	二三三	一九〇〇	二〇六

この表にもとづいてスツデンスキイはいふ、

『農業の總生産指數は、明かに耕作面積に對する農業生産の不斷の増進を示してゐる。これはより集約的な耕作への移行の結果であり、東部における牧畜の強化と一部分はまたヘクター當り收穫の増大との結果であり、要するに直接的な集約の増進の結果だ。一つ一つの地方の内部の發展を考察するならば、長い間うちつづいた價格不況にも拘らず、收穫高がかなり増大したことが認められる。』（四七三、四七四頁）。

ヨウロッパにおいてもこれと變りはない。

『同じ時代にドイツにおいて見られた農業の集約化を、ゼーリングはいちづに關稅の保護による農民の購買力の維持からの

*金ドルに換算、但し相場變動除去。

み説明する。が、これに關して注意を要するのは、購買力が恐慌の全經過期間中ほど同じ水準を保つた一方において、收穫高が一八七八——一八八二年平均のエーカー當り一九・四ブツシエルから一八九八——一九〇二年の二六・七ブツシエルに増したといふことだ。つまりドイツにおいても、穀物の購買力が低落しつゝあるときに、收穫高の激増が實現されたのである。(四七四頁)。

ここからスツデンスキイは二つの結論を引き出す。(一)ゼーリングの理論は事實と符合しない。集約化と粗放化とは異つた場所において全く同時に出現しうるものであり、農業の集約化は農産物の購買力の増進を必ずしも無條件的に前提しない。(二)農業生産の發展と農産物價格の發展は開墾の速度からは説明されえない(四七四頁)。

かくて我々はスツデンスキイ自身の積極説に接することが出来る。いはく、

『小麥耕作の擴張は一八七五——一九〇〇年の農業恐慌の原因ではなくて、單にその附隨現象にすぎなかつた。その原因はもつと深いところに横たはつてゐる。詳しくいふと、十九世紀の後半においてアメリカの農業を根柢から一變せしめたところの、そしてイギリスに端を發した産業革命によつて準備されたところの技術上の大變革に横たはつてゐるのだ。五〇年代乃至七〇年代における合衆國の工業化は、まづ國內市場において、ついで鐵道および海運の完成とともに世界市場において、農産物の販賣を促進した。しかし、それだけで、もしもそれと同時に農業の技術的革命がなかつたとしたら、現に起つたやうな發展を喚び起さなかつたであらう』(四七四頁)。

技術的變革は、スツデンスキイによると、斷續的に行はれた。すなはち前世紀の二五年ごろから鐵製の犁が徐々に使用された。三四年に特許權をえた刈取機は五五年以來はじめてより廣い範圍で使用された。二五年から五五年の間に馬をもつて營む打穀機が使用された。南北戦争およびそれにつづいたデフレーションは農業の機械化を促進したが、一八七〇年以後、すなはち東禾機

および header の採用以後、より急速なテンポをたどつた。九〇年代には小麥作付面積一エーカー當りの犁・耙・播種の費用は三〇年代に比べて四分の一にしか達しなかつた。連枷のときは一人一日の労働によつて六―一二ブッシェル打穀したものが、馬打穀機によると一〇〇―一六〇ブッシェル、蒸氣打穀機によると二〇〇〇ブッシェル乃至それ以上の実績をあげることができた。要するに、

『西部における穀物生産の擴大は土地耕耘の機械化と鐵道運輸の低廉化によつて可能ならしめられたのだ。機械はアメリカの東部でも役立つた。そこでは土地收穫の増進による集約化の意味において。この土地收穫の増進には肥料の普及も大いに預つて方があつた。全體において價格の低落したにも拘らず、收穫を増加することができた。西ヨーロッパにおいても新しい技術が利用された。そこではもつぱら、リービツヒ一派によつて宣傳された人造肥料の本質的支持による收穫増加の意味であるといふまでもない』(四七六頁)。

かくてスツデンスキイの強調するところは、新式經營による舊式經營の清算、大農場による小農場の驅逐である。

三 ゼーリングとの對照において最後に指摘しておきたいのは、農業恐慌に關するスツデンスキイの一般的・抽象的規定そのものの相違である。それは要約すれば、

『新しい農業技術の普及は、それに先立つ工業の發展と同様の連續性をもつて行はれ、そしてこのことは必然に(新しい農業恐慌に導く』(四七五頁)。

といふ考へだ。農業における斷續的な發展は、彼によると、二つの理由から説明される。(一)新技術の大量的普及には、通常、久しきにわたる試験期が先行すること。(二)新技術の普及はある程度の惰性に逢着すること。最初、新しい生産方法はまづ舊い生産方法と結合され、それから舊い生

産方法を駆逐したのちにはじめて新しい生産方法はその效力を充分に發揮することができ。さうしてこの瞬間こそ危機的なときである(四七五頁)。十九世紀末の農業恐慌に關するスツデンスキイの説明は、畢竟するにかやうな理論の具體的な説明にほかならない。

『前世紀末の農業恐慌は、それゆゑに、農業労働の生産性を急激に高めたところの技術的劇變によつて惹起された。恐慌は技術的革新の總複合體が試験済みとなつて情性の契機が克服され、一般的經濟的情勢におけるすべての變化がその破壊を可能ならしめた瞬間に、はじめて到來した。南北戦争はこの前提をつくつた。恐慌は、技術的完成のすべての可能性がつきたときに、はじめて終りを告げた。技術的進歩はその後決して停止状態に達したわけではないが、その後は一部に起つただけなので、農業の組織技術的基礎を震撼しなかつた。あるひはそれは、將來の變革を準備する新しい發明となつて作用した』(四七六、四七七頁)。

さらに注目し値ひするのは、スツデンスキイが右の理論をもつて工業品と農業品との間の長期の價格差を説明してゐる點だ。彼は書いてゐる。

『工業および農業における技術的進歩は飛躍的に起つた。農業における技術的進歩は、工業における進歩によつて影響され、工業の進歩の後に起る。試験期をへたるのち、それは突然に農業の實踐に氾濫し、かくて必然に(？)恐慌に導く。工業の革命は北アメリカにおいては、前世紀の前半から七〇年代にかけて行はれた。その結果は工産物の相對的低落であつた。一八七五—一九〇〇年の間に、それまで準備されてゐた農業における技術的革新は完了し、穀物の生産費の低下を結果としてもたらした。工業も同じ期間に一層近代化されたが、しかし農業の如き根本的な新發明を導入しなかつた。ために農産物の購買力が工産物に比して下落したのである。前世紀の末ごろに農業はその適應過程を完了した。その發展は世界戦争まで平均化された軌道のうちで行はれた。工業では廿世紀において新しい變革が起つた。電化、大量生産、規制化がそれだ。これとともに農産物に有利な新しい價格差の諸可能性が與へられた。農業の内部においてもこの期間に變革が熟したが、それは戦後になつてから出現した』(四七七頁)。

四、ゼーリングの反批判

我々は前節において、スツデンスキイのゼーリング批評とならびにスツデンスキイ自身の積極説の要旨を述べた。ところがこれについては、その後まもなく同じ *Weltwirtschaftliches Archiv* 誌上においてゼーリングみづから答辯と反駁とを與へてゐる。従つて我々は、ここに兩者を對質せしめる便宜をもつ。できるだけ簡單に要點を摘記しよう。

一 我々の理解したところによれば、スツデンスキイの唱へる第一の不滿は、ゼーリングがアメリカにおける未墾地の急速な開拓を規定した原因を明かにしてゐない、といふのであつた。あるひは未墾地の豊富な存在それ自體は開拓を可能ならしめた一條件たるにすぎず、決してその原因たりえない、といふのであつた。さうしてスツデンスキイ自身は、交通技術わけても耕作技術の進歩と普及を決定的因子と考へてゐるのであつた。ところで、これに對するゼーリングの言ひ分は、次の如くである。植民および耕作面積の増大が、有利な條件のもとに移住者の近づきき廣大な土地の貯藏なくして行はれえないであらう如く、同様にもし交通技術の輝しい發展および高度の發達をとげた土地機械工業の成果を移住者たちが具有しないとしたら、耕作の擴張は遙かに緩慢なテンポで行はれたであらうことは、疑ひをいれぬ。決して後者を無視するわけではない。否、その耕作に對する寄與と意義とは、すでに舊著¹⁾の中で精細な評價を與へたところである。ただ忘れてならぬのは、移住者たちの活躍の舞臺となつた西部地方一帯は、樹木や石塊の少

1) Sering; Entwicklungslinien der landwirtschaftlichen Weltproduktion. Eine Entgegnung. *Weltwirtschaftliches Archiv* 32. Band (1930 II) S. 223 ff.

2) Sering; Die landwirtschaftliche Konkurrenz Nordamerikas in Gegenwart und Zukunft. Leipzig 1887.

い大平原で急速な開拓と鐵道敷設とを可能ならしめたといふことだ、とゼーリングは抗辯する。

従つてこの點に關するかぎり、兩者の見解の分歧は、一方が技術的變革に決定的意義を附與してゐるのに、他方がそれを全く看過したところにあるのではない。むしろ後者が事象の背後にひそむ精神的契機を最前面に出したところにある、といふことができよう。しかり、たしかにゼーリングは、西部地方における耕作面積の急速な擴張の『最終決定的な規定根據』を、『精神的な力、習俗的な力、社會的および國家的な生活を擔つた支配的な觀念』に見出したのであつた。さればこそ彼は、移住者たちの自由に對する愛好と財産に對するファウスト的渴望やアメリカ人の社會的訓練や合衆國政府の土地政策やをば美しい言葉をもつて反復力説してやまないのだ。

『スツデンスキイの恐慌論における最惡の缺陷は、彼れの唯物史觀(?)からうまれる』(二二八頁)。

『その(アメリカにおける大規模な植民運動)の本質は資本主義的精神なる標語によつては決して特徴づけられぬものがある。なぜなれば、資本主義的精神の中には清教徒的な生活や宗教心との強い混合物の跡形さへ認められぬから』(二二九頁)。

かくてゼーリングは最後の結論に到達する。

『農業恐慌の勃發は、財産と獨立とに對する熱烈な渴望が西漸運動のテンポを決定し、耕作面積が市況とおかまひなしに擴張された、といふ事情の結果にはかならない。價格の崩落は單に集約的耕作を行つた土地ばかりでなく、あるひは技術的に遅れてゐた地方ばかりでなく、新たに開かれた小麥耕作地方そのものをも最も激烈に襲ひ、かくて爾後植民運動が甚だ緩慢となつた如き結果を招いた』(二二九頁)。

二 我々の理解したところによれば、スツデンスキイは十九世紀末の國際的農業恐慌の根因を技術的變化による集約化の増進に見出してゐる。そして彼自身數字的に立證しようとしたところ

によれば、合衆國における農産物の總價格指數は問題の期間中において總耕作面積の指數より急激に増加したことが明かであつた。それだけにまた、一見したかぎりでは、彼れの主張に少からぬ強味があるやうに思はれた。しかしゼーリングの反駁によると、それは『全く餘計な表』である、といふ。けだし、合衆國全土を扱ふ以上、單に西部のみならず、東部やさらには南部の棉花地帯やタバコ地帯をも含むこととなるから。

『大切なのは、土質や氣候の關係から主として穀作にたよつてゐた農村地方の繁榮が不可能であつたか、さうでなくとも限局された程度でのみ可能であつたといふことだ』(二二八頁)。

そこでゼーリングは、自説を強めるために新たに次の統計を持ち出す。

合衆國における小麥の收穫(自一八七一一八〇年至一八九一一九〇〇年)		
年 平 均	エーカー當り收穫	ヘクター當り收穫
一八七一—一八八〇	一一・七ブツシエル	八・六ドツベル
一八八一—一八九〇	一一・八	八・〇
一八九一—一九〇〇	一二・〇	八・二

ゼーリングによれば、問題の期間を通じて、合衆國の小麥收穫は明かにいつも低かつた。このことは、

『アメリカの小麥生産の激増は實際においてもつばら耕作面積の急激な擴張によつてのみ達せられたものであつて、收穫高の増加によるものでない』(二二五頁)。

ことを證明する。スツデンスキイは、恐慌の際にはじめてそれまでに準備されてゐた技術的革命が穀物の生産費の低下といふ結果をもつて實現されたといふが、それは當らない。人間の勞働を

輓獸および作業機に移した大進歩は、すでに前世紀の四〇年から六〇年にかけてイギリスおよびアメリカの東部で完了されてゐた。そこでは、すでに平原地方の大量移住の起る前に、破天荒な發明がなされたのみならず、農業の實踐においても試験され完成されて、ひろく一般の採用するところとなつてゐた。刈取機、打穀機、條播機、玉黍蜀植付器および耕耘器、等々。一八七〇年代以後において重大な改良と見做すべきものは、束禾機による刈取機の完成あるのみである。西ヨーロッパにおいて大いに用ひられた蒸氣犁は、合衆國においては殆んど使用されなかつた。なぜなら、粗放的な耕作には深耕の必要を見なかつたからだ(二二六頁)。

『スツデンスキイは、全く労働の節約に立脚する西部の一面的な小麦耕作經營における合衆國の機械技術が、人口の稠密な市場に近い地方のより高度の發展をとげ従つて多角的な經營より、より多くの利益を提供したことを看過してゐる』(二二七頁)。

スツデンスキイは『ヨーロッパの穀作の破滅』について仰々しく語つてゐるが、しかし例へば一ヘクター當り平均二〇ドッペル・ツェントナーの收穫をあげ、技術的に決して遅れてゐないイギリスにおいて、當時なぜ耕地が激減し牧地が激増したかは、彼れの説ではたうてい理解しえられない。これがゼーリングの主張する反批判の要點である。